

# 大学の通訳教育における OPI 及びプロフィシエンシーの活用の可能性について

## —大連外国語大学の日本語通訳教育を例に—

肖輝（大連外国語大学）

キーワード：通訳教育、コミュニケーション能力、OPI、プロフィシエンシー

### 1. はじめに

中国の外国語教育において、「聞くこと・話すこと・読むこと・書くこと・訳すこと」が重視されている。外国語習得の基本技能を高めるための通訳・翻訳授業は多くの大学で実施されていた。

しかし、中国の改革開放に伴い、高度な翻訳・通訳人材を求める市場ニーズに応え、中国の通訳教育は、専門職上の教育へと変わってきている。専門職上の通訳教育は、1979年に開講された国連通訳者養成クラスをきっかけに、21世紀に入って急激な発展を見せている（詹成 2010）。2006年に翻訳通訳学士、2007年に翻訳通訳修士の学位プログラムが設置された。それ以来、英語に限らずに、多言語の通訳教育は急速に展開してきた。現在、中国には日本語翻訳通訳修士プログラムを有する大学が 50 あまりある（李成浩 2018）。

ところが、実際の教育現場に「教学翻訳」と「翻訳教学」との混乱が生じている。プロの通訳者養成をめざすというよりは、圧倒的に言語面に比重が置かれており、外国語教育の一環として位置付けられている通訳教育が依然として多い。

今は、通訳教育の多様化や、通訳教育の専門性や難易度レベルの見直しを考えざるを得ない状況になっている。学部レベルの通訳教育について、語学力向上のための手段、異文化コミュニケーション教育の一環としての位置づけを認めたいうえで、通訳者に求められる能力の向上と結び付けて、段階的にプロの通訳者養成という目標に向かって、通訳教育を実施する必要があると思う。

そのために、OPI のレベル設定基準や、プロフィシエンシーの基本的構成概念を通訳教育と結び付けて、最終的に通訳者に求められるコミュニケーション能力の向上につながる可能性を探りたい。

### 2. 大連外国語大学の日本語通訳教育の現状と課題

大連外国語大学の日本語通訳教育は前世紀の 80 年代の初め頃に始まり、通訳授業が日本語学部の日本語専攻生全員の必修科目として実施されている。さらに、大学院レベルでは、2010年に中国初の日本語翻訳通訳修士プログラム、学部レベルでは、翻訳通訳コースを設立した。筆者は今、学部で3年生の通訳コース 1 クラス（25 人、T クラスと略す）、国際貿易コース 1 クラス（27 人、K クラスと略す）、大学院通訳修士課程 1 年生 1 クラス（17 人）、2 年生 1 クラス（16 人）の通訳授業を担当しており、現場の教師としては困難な授業運営を強いられているような気がする。日本語通訳の現状と課題を明らかにするために、筆者が担当する学部レベルのクラスを対象にアンケート調査を行った。学部レベルの二つのクラスはいずれも 3 年生の上半期である。その結果によると、①学生の語学力が不足し、レベルの差がある、②学生が「通訳者になるための技術」ではなく、「語学力向上のノウハウ」を求めていることが分かった。

#### 2. 1 語学力の不足とレベルの差

Q1 日本語能力について（日本語能力試験に基づく）

T クラス

レベル	人数	割合
N5-N4	0	0%
N4-N3	1	4%
N3-N2	0	0%
N2-N1	12	48%
N5-N4	12	48%

#### K クラス

レベル	人数	割合
N5-N4	0	0%
N4-N3	0	0%
N3-N2	9	33.33%
N2-N1	17	62.96%
N1	1	3.7%

#### Q2 日本語会話能力について（期末試験に基づく）

##### T クラス

レベル	人数	割合
優秀（90-100点）	18	72%
良好（80-89点）	5	20%
中等（70-79点）	1	4%
合格（60-69点）	1	4%

##### K クラス

レベル	人数	割合
優秀（90-100点）	7	25.93%
良好（80-89点）	10	37.04%
中等（70-79点）	9	33.33%
合格（60-69点）	1	3.7%

TクラスとKクラスのデータを比較して見れば、その差が一目瞭然である。Tクラスは選抜試験を突破した学生から構成されるのがその原因になるかもしれない。それにもかかわらず、Tクラスの学生は通訳訓練に十分に耐えられるとは言えないだろう。特に、その会話能力はアチーブメントという形で測ったものである。しかし、通訳教育で求められるコミュニケーション能力はプロフィシエンシーで、いわゆる、カリキュラムなどに左右されることのない「実力（テスト）」である。あえて、「言語活動のプール仮説」（鎌田、2015:139）を利用して、Tクラスの学生に自分のレベルを測ってもらった。

#### Q3 日本語会話能力について（言語活動のプール仮説に基づく）

レベル	人数	割合
超級	2	8%
上級	5	20%
中級	16	64%
初級	2	8%

（曹 2016）は上海外国語大学の日本語専攻生 2 年生を対象に、下半期の期末試験で OPI によるテス




トを行い、大半の学生の日本語会話能力が中級-下のレベルに達成したという結果を得た。Tクラスの結果もそのような傾向を示している。

以上の調査結果によると、大半の学生にとってプロを目指す通訳教育は少なくとも語学レベルの意味で現実的ではなく、結果的に学生の自信を失わせ、学習意欲をなくしてしまうことになるだろう。したがって、学生のニーズに応えられる多様な通訳教育が必要になると思う。




## 2. 2 通訳授業の受講の目的

Q1 大学の通訳教育の必要性について

Tクラス



選択肢	人数	割合
必要がある	23	 92%
必要がない	1	 4%
分からない	1	 4%

Kクラス


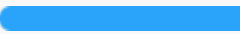

選択肢	人数	割合
必要がある	25	 92.59%
必要がない	0	 0%
分からない	2	 7.41%

Q2 通訳授業の受講の目的について

Tクラス

選択肢	人数	割合
通訳者になる	9	 36%
日本語能力の向上	16	 64%
単位取得	0	 0%

Kクラス

選択肢	人数	割合
通訳者になる	0	 0%
日本語能力の向上	25	 92.59%
単位取得	2	 7.41%

以上のように、Tクラスでも、Kクラスでも、大学の通訳教育の必要性を認めているが、いずれにしても、大半は日本語能力の向上のためであり、Kクラスに通訳者になりたいと答える人は一人もいない。

こうした学生の日本語力不足やレベル差といった問題は、必然的に「通訳授業の目標設定」や「大学の通訳教育の意味」そのものの見直しを迫ることになる。学部レベルでは、通訳教育について高度な言語運用能力の養成を中心に、異文化コミュニケーション能力を備えた人材の育成を目標にすべきであろう。そのために、OPIの測定対象とされるプロフィシエンシーを強化することにより、通訳者に求められる能力の向上につながる可能性があるのではないかと思う。

## 3. 大学の通訳教育における OPI 及びプロフィシエンシーの活用の可能性

通訳は、原則として「今、ここで」言語と文化の障壁を超えてコミュニケーションに参加したい人々のために行われる（フランツ・ポエヒハッカー，2008:4）。つまり、通訳者は文化的背景や専門的背景が異なる者間のコミュニケーションを円滑に進める役割を果すものである。通訳者は異文化コミュニケ

ーターとしての役割を果たすために、高度なコミュニケーション能力のほかに、幅広い背景知識と調査能力や通訳技術を持たなければならない。コミュニケーション能力には文法能力、社会言語的能力、談話能力、方略的能力が含まれている (Canale 1983a)。これらの能力はいずれも通訳に関わっている。

通訳のプロセスから見れば、通訳者は高度の文法能力を持って、起点言語の語彙、文法規則などによりコード化された意味を正確に理解した上で、その「意味」を目標言語の語彙・文法規則に従って訳出する必要があり、起点言語の論理展開や談話構造、比喻などの修辞技法を正しく分析し、内容的に結束性のある目標言語に訳出する力が求められる。また、通訳の理解と訳出において、方略的能力も欠かせないものになっている。例えば、語彙が聞き取れない場合、前後の文脈からその意味を推測し、類似語で置き換えたりして訳出する。その時は、背景知識が必要とされる。背景知識は、通訳者にとっても決定的に重要な要素である。背景知識がなければ、話の流れを予測することもできず、適切な訳語を選択することもできない。さらに、通訳者は通訳する際にそれぞれの場面や機能に応じた語彙や言葉遣いを選択して、その場にふさわしい適切な言語表現を使うための高度な社会言語的能力が求められる。

OPI は話者の機能的言語能力の評価である。それは現実生活において言語を効果的かつ適正に使用する能力という点における言語遂行力を測るものである (鎌田、2015:130)。OPI は現実生活の即時的かつリハーサル済みではない場面における機能的言語能力をプロフィシエンシーと捉え、ある意味で、究極の運用能力を追求したものだといえよう。これは通訳活動の「今、ここで」いう場面で求められる能力と同じものだといえよう。また、(鎌田、2015:138) はプロフィシエンシーについてどんな「機能・タスク」が、どんな「場面」において、どんな「内容・テーマ」を伴い、どんな「正確さ」により、また、どんな「テキスト・タイプ」の発話として、最終的な「総合的活動 (global task)」として遂行されるかを示すものだと言っている。そういう意味で、通訳プロセスにおいて通訳者に求められる能力と近いものだといえよう。

学部レベルで、通訳教育について高度な言語運用能力の養成を中心に、異文化コミュニケーション能力を備えた人材の育成を目標にする以上、通訳教育において OPI 及びプロフィシエンシーを活用する可能性があると思う。たとえば、OPI で通訳クラスの受講者を選抜して、その結果に基づいて個々の学習計画を立て、通訳訓練を実施する。また、OPI の認定基準、レベル設定および各レベルの基本的構成概念を参考にして、通訳教育のカリキュラムを作成する。

#### 4. まとめ

現在、中国では、通訳教育がプロを目指した通訳訓練に必要な語学レベルにない学生を受け入れざるを得ない状況の中で行われている大学が多い。このような状況は今後も続いていくであろう。通訳教育に携わる私たちは、大学における通訳教育の意味そのものについて、改めて考え直す必要がある。学生のニーズと現状に応えられるように、通訳授業は OPI 及びプロフィシエンシーを活用してコミュニケーション能力を養成する場にしなければならないと思う。

#### 参考文献

鎌田修(2015)「OPI」, 『日本語教育のための言語テストガイドブック』, 127-153, くろしお出版.

フランツ・ポエヒハッカー (2008)『通学入門』, みすず書房.

Canale, M. (1983a). From Communicative Competence to Language Pedagogy. In Richards, J. & Schmidt, R. (eds.), *Language and communication*. London: Longman. pp. 2-27.

曹娜 (2016) 《ACTFL-OPI 在日本日语教育界的应用对中国的借鉴意义分析》, 日语学习与研究, 2, 48-56.

李成浩 (2018) 《日语翻译专业建设与人才培养方案的改革探索》, 日语学习与研究, 6, 103-109.

詹成 (2010) 《中国口译教学三十年—发展及现状》, 广东外语外贸大学学报, 6, 89-92, 广东外语外贸大学.